

巻頭言

イモと人材開発

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

ふるさとを、ひとしくアンデスの山里に発し、ヨーロッパをめぐる、上陸の時・所こそ異にしても、極東日本に根をおろした甘藷と馬鈴薯の歴史を調べると、その普及発達の蔭には、どちらも多くの篤志家が介在した。

「男爵いも」という馬鈴薯の品種の一種をとってみても、それは函館ドックの専務であった川田竜吉男爵が導入したので、この名称があるという（本誌3号2頁）。甘藷の歴史の跡をたずねると、宮崎安貞、下見吉十郎、井戸平左衛門、青木昆陽、陶山鈍翁、その他幾十、幾百の推進者が、村を、山を、海を越えて、手を執り、足を運んで、琉球、薩摩、対馬、瀬戸内、日本海沿岸へと伝播して行ったものである。

この情報誌を編集して、特に痛感することは、既に作物としては安定したと考えられる甘藷、馬鈴薯に対して、いまなお黙々とその品種改良、増産、新技術開発に努力を傾倒している人達がたくさん存在することである。

ところが、戦中戦後の食糧不足のときは格別として、も早や「戦後ではない」といわれる現代では、いも作増産などということは、農政の中心課題でないばかりか、国民の生命維持の絶対条件でもないから、かりに研究の成果があがっても、周囲から喝采を博することもなく、いわんや、その功績を顕彰されることもない。そればかりではない。そういう

努力の跡を発表する機会にも恵まれない。大学、研究所、農場、試験場等でヤリクリした予算の中で、なんとか出版にこぎつくことができれば、幸運この上もないことだが、多くの場合は発表の場も与えられないでいる。

また、かりに出版されても、専門書というものは、ほとんど売れない。筆者は財団法人の設立に努力し、その運営を36年間にわたって継続し、甘藷や澱粉関係の著書の出版を手掛けたが、30部も売れたら感謝、感謝である。それは読みたいという仁と、出版との間にコミュニケーションのないせいもあるが、専門書・技術書という存在は、まことに儂いものであるのである。

さればといって、このまま放任してよいものではない。財団法人といった、本来無欲の存在であるべき団体が、できれば力をかすべき分野ではないかと推量する。どうか、読者の皆さんにおかせられては、熱心な研究者、実験者等を目にせられた暁には、本誌の編集部あてに、それらの篤志家・研究のテーマ等を知らせて戴きたいものである。

「野に遺賢なし」という言葉が昔から存在する。わたしどもは、行政府ではないし、自治体の責任者でもないが、苦勞の存する「いも作り」の努力者に、その成果、実績を発表する機会を提供して、^{ねびら}犒いの一端を披瀝したいのである。